

長野県下に於ける初誕生儀礼

近藤直也

一、はじめに

長野県下に於ける初誕生儀礼は、管見の及ぶ範囲で三十一例程確認することができた。他の都府県と較べればかなり多い。これらの分布状況を示したものが地図¹である。県の北部から南部まで、ほぼ全域に満遍無く散らばり、県下全域の趨勢を把握するには理想的である。

箱山貴太郎は「長野県の祝事」の中で、「誕生日には餅を搗いて祝った。その家の初めての子のときは、嫁の実家をはじめ親戚衆を呼んで盛大に祝った。餅はお飾りの餅とあんころ餅であったが、あんころ餅を子どもに背負わせた。背負つて歩ける子は健康で発育がよいと喜ばれたし、(傍点五歳)お飾りの餅は十二個つくり、来た人たちは子どもが達者に育つようといつて子ども体にあててやった」と述べ、県下の概況を簡略に説明している。後に詳述するが、箱山も指摘する如く、長野県下では殆どの場合、一歳未満の歩行を健康で発育良好の証左とし、他の都府県で多く見られたタブーとしての評価は全く影が薄いものになっている。なぜこれ程までに肯定的評価が圧倒的優位を占めるのか、また本当に肯定的評価ばかりで否定的評価はその名残りさえも無いのか、初誕生儀礼の本質を究明する過程でこれらの謎にも一つ一つ迫ってみよう。



地図 1

二、長野県下に於ける初誕生儀礼の事例

1、岡谷市小坂^{おさか}・初めての誕生日には餅をつき、里の両親やお仲人さま、近い親戚などを招いて、小宴を張つて祝う。お餅を重箱につめ、ふるしきに包んで子供に背負わせ強くなれと祈る。また、子供を善光寺箕に入れて「しなは出て行け、実だけ残れ」といつて、とるまねをする。

2、諏訪湖畔地方・誕生日には餅を搗いて祝ふ。その餅を重箱に詰めて「力餅」と称し、之を小兒に背負はせて箕の中に入れ、家の四方の口にて簸る真似をしながら、「實は箕へ残れ、はしか(糍)は跳しけ出ろ」と唱へる。斯かる風習は、實のある重いものを残すの意にて、重く強く育つといふ縁起からである。子供に負はせた餅は客人達が分けて食べる。

上諏訪町では、箕の中に子供を入れ、餅を十二箇取つて背負はせる。箕は實の入つた子供になるやうにとの意であり、十二箇は十二ヶ月即ち一年の意であるとか云ふ。餅を祝ふのは、昔は餅を非常に尊んだものであるから之に一生ありつけるやうに、又は力餅と稱して體力の出るやうにとの意味合ひに據るのである。

豊平村では、誕生日の餅を道祖神に上げる。中には投げつける人もある。

親戚からは主として下駄・足袋・靴等の履物を贈つて祝ふ。返禮には餅又は牡丹餅を配つて答へる。

3、大町市社・館之内・生まれてから最初の誕生日を迎えた時、ハツタンジョウイワイ(初誕生祝い)が行われる。嫁の実家の母親、ハネオヤ・チュウニンなどオミヤマイリの人々が招待される。招待しないで家だけで祝う家もあるが、この頃から歩きはじめるので、履物・着物などが贈られる。お祝いのお返しとして、あんのついた餅を配る。子供には、あんに砂糖を入れない甘くない餅を月の数の二二三、重箱に入れて風呂敷に包んで背負わせる。うまく立てない時には、麵棒につかまって立たせた。昔は餅を背負させた赤子を箕の中に入れて、嫁の実家の母親が糍は出て行け、よい実が残れと唱えながらはぎる真似をして、背負つた餅はみんなで食べた。

- 4、大町市宮本・生後一年目の誕生日にお祝いをする。本家と新宅および近親者をよんで酒肴ぐらいで内輪だけで子供の前途を祝う。子供には月の数だけ餅を背負わせ、トアオリ（板箕）の中にその子供を入れ、「しいなは舞っていけ、実は生まれ」といつてあおる。後に誕生餅を隣近所にもくばり、お客には持たせて帰す。
- 5、茅野市南大塩みなみおの・生後一年目の誕生日には、里の両親や知友を招く。餅を重箱に入れて背負わせたり、またはそのまねをする。この日にはあんころもちをよくつくった。
- 6、飯田市大平・一年目の初誕生も初めての子ども時は嫁方の家の者呼んで盛大にやった。男の子の場合は特に賑やかだったという。昔の子どもは今の子どもみたいに初誕生といつても歩けん子が多かったが、丸いおそなえ餅を風呂敷にくるんで背負わせて歩かせた。一歩でも二歩でも歩ければみんな拍手喝采をして喜こんだ。歩けん子は藤箕に座らせ、「よいしょ、よいしょ。」と年寄りが振るといいといつて年寄りが振ったが子どもは驚いて泣き出してしまうことが多かった。また、年寄りが抱くと長生きをするともいつて年寄りが交互にだいたりした。
- 7、飯田町附近・初めての誕生日には餅を搗き、親戚に配り、又は招いて饗應する。此日大きな鏡餅を作り、それを子供に背負はせ、大きな箕の中にその子供を入れて三回あほる。「しいなが舞って實が残れ」と云ふ。その時子供に物差を杖に突かせる等の事がある。
- 8、佐久市今岡・子供が生まれて初めての誕生日を、初誕生または誕生祝といつて、餅をつき、重箱につめて子供に背負わせ、箕の中へ立たせて祝う。近親や近隣、またお祝いをもらった家には餅にあんをつけて重箱につめてくばる。
- 9、南佐久郡南相木村栗生あいき・生後一年目の日を初誕生といい、この日餅をついて祝う。餅を重箱に詰め、箕の中に入れた赤ん坊にこの重箱を背負わせて力が出るようにと祈る。餅は祝いをもらった家と近所や親戚に重箱に入れてくばる。
- 10、南佐久郡栄村・誕生前に歩くような子供は一生運が悪いといつて、そういう子供には誕生を早める。

- 11、上伊那郡高遠町・生後満一カ年になると、仲人様、鉄漿親かねつけその他近親者を招き、赤飯をたいて誕生日を祝う。子どもには鏡餅、または牡丹餅を背負わせ、箕の中にいれてあおり出す真似をする。このとき「糺は出ていけ実は残れ」といいながらあおつたものである。
- 12、上伊那郡高遠町山室やまむろ・生後一年目のお誕生には餅をつき、大きく鏡餅を三つとり、一つずつ子供の背中にのせる。これはオツツケルだけのまねごとで、「万年よ万年よ」と唱える。その後で子供を箕の中に入れ、「しいな舞つてけ、実は残れ」と三度唱えてヒダス。これは実家の親・婚家の親・仲人の順にする。
- 13、上伊那郡辰野町飯沼いぬま・初誕生日には近親をよんでお客をする。お餅をつき、小さく三つ丸めてお茶わんに入れて、それを赤子に背負わせ、箕の中に入れてハギレ出した。
- 14、上伊那地方・一年目に里親はじめ近親を招いて祝う。餅を搗き餡ころ餅にして子供にしよわせ、カアミ(大きな皮箕)に入れてあおる。川島では小豆餅を男親の茶碗に入れ、袋に包んで子供にしよわせ、箕の中に入れ三度あおる。この時「糺はまつて実は残れ」とか「いい実はこつちこい、糺はそつちいけ」などと唱える。箕輪町南小河内では、子供に餅をしよわせて、手を持って歩く真似をさせて、箕に入れて「糺はまつて実は残れ」と唱えながらあおる。(北部)
- 手良の蟹沢や美篤の笠原では、子供に餅を背負せて箕に入れ、大豆を一升入れて「糺は出ていけ実は残れ」と唱えながらあおる。(中部)
- 生後満一年たつと誕生のお祝いをする。仲人・里の親・近親・産婆等をよぶ。三升三合五勺の餅を搗いて、大きなお供えを作って床の間へ飾る。お神酒・鯛かいなだのお頭つき二匹が供えられる。子供は美しい着物に着かえて、大きな風呂敷へお供えの上の方を包んでしよわし、藤箕に入れて、仲人が座敷の東の方の窓をあけ、子供の名を呼んで「…ちゃんの、糺は出ていけ、実は残れ」と三べんくりかえしてあおる。それから男の子のときは書き道具(硯か筆)・本・そろばん・大工道具一つ・作道具の五種類、女の子はそろばん・筆・本・針道具・編道具の五種類を並べておいて、這って行ってその一つをつかませる。この時つかんだ品物によって、その子が成

人してから、「この子は字が上手になるぞ」とか「こいつやつぱり百姓が好きだわい」などと将来を占った。飯島町本郷では「浦島太郎は百三つ…(子供の名)も百三つ、糺は出ていけ、実は残れ」と三回唱える。お祝いが終わると、お供えは幾つにも切ってお土産にやる。駒ヶ根市火山では箕に入れてあおるとき、仲人・カネ親・名づけ親が、かわるがわる「糺はまって、実は残れ」唱える。(南部)

餅を搗ぎ、お供えを風呂敷に包み、赤坊にじよわせて一斗の竹箕に入れ、里の親か仲人親が三回ひだす(あおりだす)。その時「糺実はそちへ行け、いい実はこちへこい」と三回唱える。これをあて石(藁を叩くあて石)の所で行う家もある。荊口ではお供え餅をしよわせて、婚家の母親が箕に入れてあおるが、高遠町西高遠では一斗箕に入れて「実は残れ、かすは飛んでいけ」と唱えながらあおる。高遠町黒沢では三升三合の餅を搗ぎ三つのお供えに分ける。一つのお供えを(一升一合)子供に背負せ、真中において皆で「千年よう、万年よう」ととなえて三回くりかえす。そのあと箕の中へ入れ「糺はまって実は残れ」とあおり、そのあと「さあころべ」といつてころばす。(東部)

15、下伊那郡清内路村・一年目、子供に誕生餅を背負わせる。筆や算盤・本・物指等の内、好きなものを取らせる。子供はとつたものを得意とするようになるという。大きな皮箕に入れてあおる真似をする。立派な実が残る意味がある。誕生に歩く児は、成長が早いといつて喜んだものである。

16、天竜村大河内・ミの中に子供をすえておき、そこへ大福餅を投げてやつたり、ますの中に大福餅を置いてやると、じょうぶな子は拾ってかみつくという。大河内では、餅を背中にしよわせるといふことはないが、子供の頭の上のにせる。そうしてから、「誕生餅」といつて親戚や隣組の衆に配った。

17、下伊那郡高森町上平・誕生祝いにはお供えをつくり、子供に背負わせ、この餅を切つて近親にくばった。生まれて一か年たつた子供を藤箕に入れてヒダス。「しいなは舞つて実は残る」といつて仲人の女親が行なう。この日にはまた親戚をよんで「ごちそうする」。

18、北安曇郡小谷村・トリアゲ婆さんが大きな餅を三箇シキノウ(蒸籠の底に敷く麻製の布)で包んで子どもに背

負わせ竹箕の中に立たせる、そして麵棒で突く。もしこるばなければ丈夫に育つといった。泣けば泣く子は育つといったところもある。この餅は一つはトリアゲ婆さんに一つは里親に配り、残りの一箇は家で食べた。親類や近所へは餅を配った。そのお返しは履物（下駄草履）とか足袋などだった。

19、北安曇郡内・一般に箕の中へ入れるのは同じである。お餅を父親の碗の中へ入れて小皿をかぶせて背負はせ、メンバーで後から一寸突く（大町、平、神城、社）或はメンバーを杖につかせる（大町、平、神城、社）生れ月の数だけ餅を背負はせて箕の中へ入れて「シイナは出て行け」といってハギル真似をする（會染）。ハギル真似をする處は、大町、美麻、社等方々にある。小谷では箕の中に入れて男の人に杵で頭をたたいて貰ふ真似をする。

20、北安曇郡小谷村黒川・生後一年目にお誕生祝いをする。客立てはお七夜やお宮参りのときより広く、黒川全戸の北村まで招待する。誕生の餅をつき、祝いの餅の取り方である五つか七つの奇数に取る。子供はそのうちの三個の餅を背負わされ、竹の箕の中に立たされ麵棒で突かれる。このとき転ばなければじょうぶに育ち、転ぶと弱いといわれている。この三個の餅のうち一個は嫁の親にくばり、残りの一個は家で食べる。餅は重箱に七個か一個入れて隣近所にくばる。

21、南北安曇郡・餅をついて背負わせ、箕の中へ立たせて、麵棒で突からかす。

22、東筑摩郡朝日村針尾・生後一年目には人を招いて誕生祝いを行なう。あんをつけた餅を三つか五つ父親の茶わんへ盛って、ふるしきに包んで子供に背負わせ、皮箕へ入れて「しいなは舞い出る、実はとまれ」といって、あおる。また、子供に餅を背負わせたまま歩かせてみる。

23、東筑摩郡四賀村横川・生後一年目の誕生祝いには、餅をついて子供に背負わせる。鏡餅を三つこしらえ、そのうちの二つを背負わせて、残りの一つを頭にのせ、竹箕に入れてそこに豆や銭も入れてカンマサス。このように三つの餅を背負わせて歩かせ、また箕の中に入れて「しいなは舞ってけ、実は残れ」といってあおる。

24、上水内郡小川村・初誕生の祝いには近所の人、里の親、親類をよんで祝う。このとき餅を重につめ風呂敷に包んで赤子に背負わせ、竹箕に入れて座敷に連れ出し、メンバーを杖にして立たせる。この餅は臨席した人に分与

する。今は初孫のみ。

25、上水内郡小川村桐山・初子のときには、近所の人・里の親・親類を招いて餅をついて食べてもらう。このとき、キナコやアankoをつけたボタ餅を十二個、米一升はいる重箱に入れ、これを風呂敷に包んで、赤ん坊に背負わせてタカミ（竹の箕）の上に立たせる。赤ん坊が立てた場合は、飯シャモジで突いてこぼす。それを三回繰り返す。場所は座敷で、赤ん坊はめん棒を杖にする。背負った餅は、臨席した人に分けて持って行ってもらう。その他、ついた餅も一緒に持ってもらう。

26、上水内郡鬼無里村下楡木・折橋・砂田・川下・お祝いに餅をつく。重箱に餅を入れて背負わせ、ダイドコロ（入り口の土間）のジョウフ石（わらたき用の平石——ジョウベ石ともいう）の上に立たせる。

27、上水内郡鬼無里村・生後一年目の初誕生日には、餅を子供に背負わせる。また、餅を近所や親戚にくばる。

28、更科郡大岡村仏風・餅やそばをつくり新仏にも供え、婚礼のときと同じほどの客ヨビをする。客はお祝いに衣料などを持ってくるが、その客には、おみやげを持たせて帰す。またこの日、餅を入れて赤子に背負わせ、メンボウの杖をつかせ、箕の中に立たせる。

29、下高井郡山ノ内町前坂・生後一年目の誕生日には、餅をついてそれを重箱に入れ、子供に背負させた。また、近い親類をよんでごちそうをし、餅に小豆のあんをつけ重箱で親類や取り上げ婆サンにくばった。長男と長女の場合は、嫁の実家へ行って祝ってもらった。

30、木曾郡檜川村奈良井・平沢・贄川・誕生日には餅をついて祝った。その家の初の子の時は、嫁の実家をはじめ親戚衆をよんで盛大にやった。集まった者達が一杯飲んでいるさなかに誕生日を迎えた子供に餅を背負させた。餅はおかざりの餅・あんころ餅であったが、多くあんころ餅を背負わせた。背負わせる前に神棚にしんげた。餅を背負う子は今の子とちがって少なく、背負って歩く達者な子は少なかった。それでも隣近所へ背中に餅をつけてもらい、手をひいてもらって、おくばりできる子もおった。このような子供は達者な子だといって喜んだ。この日はまたおかざりの餅を十二箇つくり、集まった者達がその餅を達者に育つようにと行って子供の体にあてて

やった。この日はまた、板で新しいごみとりを作り、その中へ子供を坐らせ、年寄衆がかわるがわるそのごみとりを持って「しいなはこぼれて実は残れ、とうぼつさくは、くまんくまん。せんくひやくじやく、これにあやかれあやかれ。」と喋って振った。平沢では昭和三十年にはいってもごみとりを作り、子供を入れてふった家があった。³¹

31、西筑摩郡三岳村・初誕生で、餅をつき、里方の親を呼んで祝うが、この時、搗餅をふるしきに包み、肩にのせてせおわせ、ぞうりをはかせ、母親が手をとって歩かせるしきたりがあり、子どもが独力で歩ければ発育がよく強い子どもだといつてよろこんだ。誕生祝いは、第一回のときが一番盛大で、その後はあまり行なわれないようである。³²

三、事例研究

1の岡谷市小坂では、仲人と里の両親・近い親戚を呼ぶ程度の小宴を開き、餅を搗いて祝う。重箱に餅を入れ、これを風呂敷に包んで背負わせ、「強くなれ」と祈るのであるが、実際に満一歳の子供が餅を詰めた重箱を背負って立ち歩き得たのか、甚だ疑問である。殆ど立つ事すら不可能である。現実よりも理念が先走っていた。さらに、その子供を「善光寺箕」に入れて「しいなは出て行け、実だけ残れ」と唱えて「とるまね」をするという。

「善光寺箕」の具体的形状は不明であるが、とにかく満一歳の子供を箕の中に入れて初を選別する如く、子供の良い部分と悪い部分を選別しようとしていた事がわかる。シイナとは殻ばかりで中味が詰まっていない初のことであり、「実」とは中に米がしっかりと詰まった初を指す。従って、「とるまね」とは、糘しなが混じった初から糘だけを取り除き、有用な初を残そうとしたものであった。選別用具としての箕が登場する必然性はここにあった。

満一歳の子供は、初誕生儀礼以前は糘混じりの初はらの山に比定され、糘は満一歳で立ち歩けない子供を象徴し、実の詰まった初は満一歳で立ち歩く事ができる子供を象徴したものと判断し得る。この事例は満一歳を迎える初誕生

日が持つ通過儀礼上の重要さを示すと同時に、初誕生日当日には是が非でも立ち歩かねばならないという世間の枠組みの強烈さを示すものであったと言えよう。

2の諏訪湖畔地方の事例は、昭和八年刊の「旅と伝説」六巻七号に掲載されたものであり、かなり古風を留めるものとして注目しておきたい。ここでも重箱に詰めた餅を背負わすが、これを「力餅」と呼ぶ。この名称から、餅を背負って立つ事を期待した行事であった事がわかると同時に、現実の子供はまだ歩いていなかったという状況も見えてくる。万一步けば、「力餅」という名称ではなく、フッタオシ餅などという転倒を意図する名称並びに儀礼が付随するはずである。

餅を背負った子供は箕の中に入れられ、「家の四方の口にて簸る真似」をしながら、「實は箕へ残れ、はしか(糞)は跳しけ出る」と唱える。家の四方の入口毎にこの儀礼を行なうのであるから、かなり入念である。場所に注目すれば、家の内と外という境界を示す場所が、一歳以後と未満という通過儀礼上のケジメの時期として象徴されていた事がわかる。ここでは、「實のある重いものを残すの意にて、重く強く育つといふ縁起から」と説明するが、家の出入口という境界性を持つ空間、満一歳未満と以後という境界性を示す時間を考慮すれば、「重く強く育つ」事だけでは説明がつかない。

さらに子供に背負わせた餅は、「客人達が分けて食べる」ものであり、他者には配らず身内だけで消費するものであった。この餅の中には排除すべき糞の性格が含まれていたのではなからうか。

上諏訪町では、一二個の餅を箕の中で背負す事になっているが、「十二ヶ月即ち一年の意」という。また箕は「實の入った子供になるように」、餅は「昔は餅を非常に尊んだものであるから之に一生ありつけるやうに、又は力餅と稱して體力の出るやうに」と説明する。一二個の餅の数が一年を象徴したのである事はある程度理解はできるが、箕や力餅に関してはかなり場当たりの説明になっている。一年という期間と箕と餅の三者は、相互に密接に関連し合った物であり、これを各々別個に説明しても初誕生儀礼の本質は見えてこない。

この儀礼に招待された親戚の人々は、「主として下駄・足袋・靴等の履物を贈って祝ふ」ものであった。初誕生

日は即初歩きに直結していたのであり、下駄や靴などの履き物はこの事を雄弁に物語る。と同時に、これ以前は四つん這いという状況が暗に示され、初誕生儀礼を触媒としてケモノからヒトへという変革の構造がこの儀礼の底辺に構築されていた様子を窺い知る事ができる（拙著『鬼子』と誕生餅 岩田書院刊参照）。初誕生日は、満一年が過ぎたという単なる時間的経過だけではなく、その裏に付随する世間的枠組こそが猛烈に子供の位置付けを制約するのであった。その時までには歩いて歩けなくても、とにかく満一歳の初誕生日当日に初めて立ち歩いた事にしなければならず、例外は全く許されなかったのである。

3の大町市社・館之内では、初誕生日の祝いとして、実家の母親やハネオヤ・チュウニンなど宮参りに参加した人々から「この頃から歩きはじめるので、履物・着物などが贈られる」という。実際は、一歳も二、三ヶ月過ぎなければなかなか歩き出さないものであるが、儀礼上はこの日に歩いた事にしようとする意識の表われが、履物や着物といった歩く事を前提にした贈答品として示される。見方によれば、満一歳過ぎた段階で即歩き出さねばならないというプレッシャーの裏返しでもある。

また3では、重箱に入れた二個の餅を背負った子供がうまく立てない時には、「麵棒につかまって立たせ」ていた。殆どの子供が立てなかったと考えられるが、この場合誰かが子供を手で支えれば簡単に済むはずである。しかし、どういう訳か麵棒が使われる。麵棒その物に特別な意味があったのかもしれない。

子供が背負う二個の餅には、甘くない餡をつけており、人になめられないようなしっかりした人間に育つ事を願っていたのである。この事を考え合わせれば、麵棒が殊更に登場する背景には、ケモノとしての四つん這いからヒトとしての二足歩行の過渡期を意味する、三本足歩行を象徴する思想が存在していたのではなからうか。

ここでも子供は餅を背負った状態で箕の中に立ち、「糍は出ていけ、よい実は残れ」と唱えながら「はぎる真似」をし、背負った餅は参加者全員で食べるのであった。甘くない餡餅二個を背負った満一歳の子供の生身の体は、この段階で糍混じりの粉と見做され、箕によって糍と実の入った粉を選別する如く、ここでも「初誕生初歩きの原理」（拙著『鬼子』と誕生餅 岩田書院刊参照）が実践されていたのである。背負った餅を参加者全員で食べる点

から推せば、この餅には歩けない子供としての糺が象徴されていたのではなからうか。誇るべきでない不名誉な事柄が象徴された餅であるため、外部に配る事が憚られ、内々で処理されたのであろう。

4の大都市宮本では、子供に一二個の餅を背負わせ、トアオリ（板箕）の中に子供を入れて、「しいなは舞っていけ、実は止まれ」と唱えてあおる。ここでも一二個の餅を背負った満一歳の子供の生身の体は、板箕の中で上下運動をするのであった。板製の箕をトアオリと呼ぶ点に注目したい。上下運動と共に、煽る事によって風を起し、中味の詰まっていない糺を飛ばすのである。トアオリのトとは板戸を意味していたのであろう。薄板をはぎ合わせて作った箕がここでは使われていた。

6の飯田市大平では、「昔の子どもは今の子どもみたいに初誕生といつても歩けん子が多かったが、丸いおそなえ餅を風呂敷にくるんで背負わせて歩かせ」ていた。この資料は昭和四七年に報告されたものであるが、ここで言う昔とは昭和初期頃を指していたのではなからうか。産育環境の変革により、戦前と戦後ではかなり大きな隔たりがあったようである。殆どが歩けない状況の中でも、満一歳になれば歩けない事がわかっていながら、さらにその上に供物の丸餅を背負わせて無理やり歩かせるのであった。恐らく誰かが足腰を支え、倒れないようにしていたのであるが、このような状況で一歩二歩でも歩けば「みんなで拍手喝采して喜ぶ」のであった。餅を背負った上での歩行に対する期待がいかに高かったかがよく理解できよう。とにかく満一歳の誕生日には、歩く事が至上命題であった。どうしても歩けない子供に対しては、藤箕の中に子供を坐らせ、「よいしょ、よいしょ」と唱えながら年寄りが振る。つまり、藤製の箕の中に子供を入れて煽るのである。ここでは掛け声が「よいしょ、よいしょ」になっているが、他の類例と比較すれば元は「糺は飛んで行け、実は残れ」と唱えていたであろう事は簡単に想像できる。これによって子供の歩行を促していたのである。時代の推移により、一歳までに歩く子供が増えれば、歩けない子供に対する箕を使った儀礼も徐々に廃れてくる。その過渡期の状況が、「よいしょ、よいしょ」という簡略化された掛け声に反映されているようである。

ここでは、年寄りにもう一つ重要な役割があった。それは、子供が長命にあやかるためとして、年寄りが交互に

子供を抱く事である。初誕生儀礼では、ケジメとしてのこの時点に於ける二足歩行と長命祈願が二つの主な目的となっていた。

7の「飯田町附近」の事例は2と同様昭和八年の報告であり、かなり古風を留めている。子供に鏡餅を背負わせ、大きな箕の中に入れて三回煽るのであった。「鏡餅」であるからには、先に神に供えていたものであり、神の名の元にこの儀礼が行なわれていた。さらに「しいなが舞って實が残れ」と唱えながら三回煽るのであり、かなり儀式性の高いものである事がわかる。ここでは、3の如く麵棒ではなくどういふ訳か物差を杖に突かせる。後に詳述する予定であるが、麵棒の活用は県北部を中心に八例が集中的に分布する。独り7のみが県南部に孤立する形になっており、麵棒と物差しの間、何がしかの共通項があったようである。

12の上伊那郡高遠町山室では、鏡餅を三つ作り、一つずつ子供の背中にのせる。具体的に、四つん這いになった背中の上に乗せるのか、または立たせてその背中に当てるだけなのか不明である。しかし、「これはオツツケルだけのまねごとで『万年よ、万年よ』と唱え」る点から推えれば、立った子供の背中に形式的に押し当てていたのである。この「万年よ」の唱え言は、明らかに長命祈願であるが、同様の意図は前述の6でも見受けられた。6では長命にあやかるためという事で、年寄りが交互に子供を抱くのであった。

12では長命祈願の餅の押し当てる後、子供を箕の中に入れて「しいなは舞ってけ、実は残れ」と三度唱えて簸出すのであった。普通は、餅背負いと箕の簸出しが同時に行なわれるのだが、ここでは餅背負いは長命祈願に、箕の簸出しは満一歳の段階のケジメとして、二つに分かしている。餅のオツツケそのものも、元は「鬼子」とヒトの子のケジメとされていた点から推せば、ここでの長命祈願は後に派生した新たな説明と言えよう。

14の上伊那地方の資料は広範囲に亘るものの、その中味はかなり注目すべきものが多い。北部ではカアミ（大きな皮箕）が使用されており、竹ではなく樹皮製の箕が使われていた。さらに、背負う餅も小豆餅であり、これを男親の茶碗に入れて袋に包んでいた。

また南部では、三升三合五勺の餅を搗き、これで大きなお供えを作って床の間に飾る。さらにそこには、神酒・

鯛かいなだのお頭つきの魚二匹が供えられている。いかにこの初誕生儀礼が厳肅な神事として機能していたかが理解できよう。初誕生日を迎えた子供は、美しい晴着に着かえ、鏡餅の上の方の小さい餅を風呂敷に包んで藤箕の中で背負う。この時に仲人が座敷の東の方の窓をあけ、子供の名を呼びながら、「…ちゃんの、糺は出ていけ、実は残れ」と三度唱えて箕を煽るのである。この唱え言から、餅を背負った生身の満一歳の子供の身体と糺混じりの初とが不即不離の関係にある事がよく理解できよう。「…ちゃんの」の「の」は、格助詞であり、糺も実もその子供の所有というよりはむしろ分身として表現されている事は明白である。糺が、背負った餅に相当するとすれば、生身の体は文字通りミ（身・実）以外の何物でもない。この時期に、何故殆ど背負えもしない餅を殊更に背負わせなければならなかったか、その不自然さはこのように解釈すれば、完全に理解できよう。背負い餅は、満一歳の通過儀礼上のケジメ（「初誕生初歩きの原理」）として、どうしても排除しなければならぬ四つん這いで這うというケモノ的性格を持つ。また、逆に「一歳未満で既に歩くという、かつて殺されていた「鬼子」的性格の象徴でもあった。一歳未満は四つん這いの状況からケモノが連想され、ヒトとケモノの両方の性格が同居すると見做されている糺を排除する事によつて、実が残ると同様に、一歳以後はヒトとして二足歩行すべき事があるべき姿とされていた。ケモノまたは「鬼子」的性格を排除する事によつて、二足歩行するはずのヒト的性格が残ると考えられていたのである。これをシステム化したものが、「初誕生初歩きの原理」に即した初誕生儀礼であった。

仲人が東の方の窓をあけ、「…ちゃんの、糺は出ていけ、実は残れ」と三度繰り返して、その度毎に餅を背負った子供を藤箕の中に入れて煽る一連の形式には、その一つ一つに重要な意味が含まれていた。直接の執行者が仲人である事、東の窓を開ける事にも、餅背負いや唱え言・箕の活用と同等の意味があった。儀礼の執行は、子供にすれば実母が一番身近で、ふさわしかったかもしれないが、仲人が行なっていた。父方や母方の祖父母でもなく仲人であった。仲人は、子供の両親を結びつけた触媒でもあり、境界上に位置する人であった。子供が儀礼上ケモノ的存在からヒトとしての存在に変態する過程では、境界上に位置する仲人こそが最もふさわしかったと言える。

一方、新たな世界への誕生を象徴する儀礼の中では、これから旅立とうとする子供に最もふさわしい方角は日の

出を象徴する「東」である。西でも南でも北でもなく「東」にこだわる必然性はここにあった。

この儀礼の直後、男児には書き道具（硯か筆）・本・算盤・大工道具一つ・農具の五種類、女兒には算盤・筆・本・針道具・編道具の五種類を並べ、エラビドリによってその子の将来を占う。ケモノの性格とヒトの性格が混在していた状況から、ケモノの性格が捨象され、ヒトの性格が純化した段階で初めてヒトと見做される。ヒトであるからには、将来ヒトとしての道を歩まねばならない。この事を視覚化したものが、エラビドリであった。以上、上伊那地方南部の一連の初誕生儀礼を詳細に検討すれば、一見個々ばらばらにみえる儀礼が、互いに密接にリンクしながら、全体で一つの壮大なケモノからヒトへの誕生を主題としたドラマを構成している事がよく理解できる。

さて上伊那地方東部の高遠町黒沢では、三升三合の餅を搗き、三つのお供えに分けて神に供える。恐らく二段重ねの鏡餅の形に作ったものであろう。このうちの一組、即ち一升一合でできた鏡餅を子供に背負わせ、この子供を参加者全員が取り囲み、「千年よう、万年よう」と唱えて、これを三回繰り返す。神の名の元に、千年も万年も長命するようにという祈願であるが、同様の事は飯島町本郷の「浦島太郎は百三つ、…（子供の名）も百三つ、糺は出て行け実は残れ」と三回唱える事例でも見受けられる。さらに前述の6・12でも長命祈願があり、上伊那から木曾地方にかけて限定的に分布していた。

高遠町黒沢では、「千年よう、万年よう」と三回唱えた後、一升一合の餅を背負った子供を箕の中に入れ、「糺はまつて実は残れ」とあり、そのあと「さあころべ」といって転ばすのであった。県内の殆どの事例は、餅背負いを力強さと健康の象徴のように見做し、立ち歩く事を非常に喜ぶ環境にあった。こんな中において、全体の趨勢に逆行する如く「さあころべ」といって実際に箕の中に一升一合の餅を背負って立っている子供を転ばす儀礼は極めて特異である。これはどのように解釈すべきであろうか。

この謎を解く一つのヒントが、直前の「糺はまつて実は残れ」と唱えながら、餅を背負った子供を箕の中に入れて煽る儀礼に隠されているような気がしてならない。箕を煽りながら、糺と実を選別する場合、少しずつ地面に落とす。風に吹かれるため、中味の充実度によって糺と実は落ちる場所が異なる。「さあころべ」といって実際に子

供を箕の中で転倒させる儀礼は、箕による選別の状況をそのまま忠実に再現しようとしたのではなからうか。転んだ拍子に、一歳未満で既に歩く「鬼子」的性格が象徴された靴、または一歳過ぎてもまだ四つん這いのままというケモノ的性格を象徴した靴がとんで行き、実（ヒトの子としての身）が残り、純粹なヒトとして再生する。このように考えれば、全く特異に見られる儀礼も満一歳段階におけるケジメの一環として評価し得る。この事例は、餅一升一合背負って立ち歩いたから、単純に丈夫で健康だとは言いい切れない部分がある事を示す。光の部分だけではなく、影の部分の存在が確認できる事によって、初誕生儀礼はいよいよ立体的な存在感を増すのである。

18の北安曇郡小谷村の事例もまた、影の部分を髻髷とさせる伝承を持つ。即ち、トリアゲ婆さんが大きな餅三個をシキノウ（蒸籠の底に敷く麻製の布）に包み、これを子供に背負わせて竹箕の中に立たせ、麵棒で突くのである。恐らく、かつては殆んどの場合満一歳ではまだ充分に立ち歩きできなかったため、大きな餅三個も背負って立つ事などおよそ不可能であり、誰かが後ろから支えてやっと立つ事ができたであろう。その子供を、麵棒で突くのである。明らかに転倒を狙ったものではないか。しかしここでは、「もしころはなければ丈夫に育つ」とか「泣けば泣く子は育つ」とも言うのである。明らかに転倒を狙った儀礼と、それにまつわる伝承には大きな矛盾が感じられる。倒そうとしておきながら、倒れないのは元氣な証拠と言っており、この説明は明らかに後に付加されたものと考えざるを得ない。普通は、麵棒で突かれて大きな餅三個を背負ったまま倒れ、その衝撃で泣くはずである。ところが泣けば泣いたで、「泣く子は育つ」と説明する。倒れないにしろ、倒れて泣くにしろ、いずれの場合も子供は丈夫に育つと確信されていたのである。詮じ詰めれば、この儀礼は倒れなくても、倒れて泣いても、全体の意図には関係なく、要は満一歳に餅を背負って箕の中に立つ事に意味があったという事になる。倒れるか否かは二次的なものであり、満一歳のケジメに最終的な意図があった。麵棒で突く儀礼は、他の都府県で多く見られた一歳未満で歩いた場合、必ず餅を背負わせて転倒させていた儀礼と極めて近い。儀礼的に倒して歩かなかつた事にする。これによって、発育異常の「鬼子」ではなく、普通のヒトの子と見做そうとしていた。即ち、長野県下でも一歳未満の歩行は健康で丈夫な印などではなくタブー視されていた。麵棒で突く儀礼は、まさに意図的転倒狙いの名残りとして位置

付けられるのである。

ケジメをつけるためには、子供の実際の誕生という過渡儀礼に重要な役割りを果たした境界に位置するトリアゲ婆さんがふさわしかった。14の場合は仲人が執行していたが、仲人もトリアゲ婆さんも、文字通り境界の人であり、過渡儀礼には必須の存在であったと言えよう。

18では「糺は飛んで行け、実は残れ」という唱え言を確認できなかったが、麵棒で故意に突く儀礼はそれを補つて余りある。一歳未満の子供が背負った三個の大きな餅は、一つは執行者のトリアゲ婆さんに、一つは里親に、残りの一個は子供の生家で食べた。親類や近所へは祝いであるから当然餅を配るが、子供が背負った餅は一切配らなかつた。血の論理で言えば、トリアゲ婆さんに背負い餅を配る必然性などどこにも無い。だが、他の親戚をさし置いてトリアゲ婆さんに配当される理由は、この餅とこれを取り巻く初誕生儀礼の本質がケジメにあり、境界に位置する人がトリアゲ婆さんであったからに他ならない。背負い餅の処分の仕方からも、餅の持つ性格が明確に見えてくるのであつた。

19は北安曇郡内の事例報告であるが、昭和一九年の報告であり古風を留めるものが多い。大町・平・神城・社の各地区の例として、餅を父親の碗の中に入れ、上から小皿で蓋をして、これを子供に背負わせ、箕の中に入れていゝる。普通は重箱などに入れるのであるが、北安曇地方では、父親の碗に入れており、一つの地域的特徴であつた。さらにここでは、箕の中で餅を背負つて立つ子に対し、「メンバーで後から一寸突く」或はメンバーを杖につかせると言つのである。麵棒で後から突く事と、麵棒を杖につく事が同格で述べられているが、その意図は全く逆である。後ろから突く儀礼は、明らかに転倒を狙つたものであり、杖につく儀礼は歩行の促進を意味する。互いに相反する意味を持つ儀礼が、何の矛盾も無く大町・平・神城・社という同一郡内に並存する所に初誕生儀礼の本質が見え隠れするようである。即ち、初誕生日に於いて既に立ち歩いていようが、まだ歩けない状況であろうが一切関係なく、世間の枠組みとしては満一歳の初誕生日当日から歩き始めるものという内規があつた。この内規に適合させるべく、既に歩く子には後ろから麵棒で突き倒し、まだ歩けない子には杖として活用させ、是が非でも歩いた事

にしようとしたのである。この状況は、山形・福島両県に見られたブタオシ餅とブッタテ餅の関係と全く共通する。同じ一升餅であるが、子供が既に歩いている場合はブタオシ餅と呼ばれ転倒を期待し、未だ歩かない場合はブッタテ餅と呼ばれ歩く事を期待されるのである。

19では、餅の名称には意味を持たせず、代わりに麵棒にその意味を持たせようとしたのであった。餅の如く明確な名称は持たないものの、麵棒を伴う儀礼内容を詳細に検討する中で、この構造が明確に見えてくるのである。

さらに小谷では、餅を背負った子供を箕の中に入れ、「男の人に杵で頭をたたいて貰ふ真似」をしている。子供は、儀礼上杵で頭を叩かれているのである。「糺は出て行け、実は残れ」という唱え言は一般的であり、箕の選別機能と並存するのだが、杵による頭叩きは極めて特異である。唱え言と連動させて考えるならば、この場合の杵は餅搗きではなく脱穀用と見做すべきではなからうか。稲穂から籾を分離する。または、籾から玄米を分離する。この工程が、杵による頭叩きに象徴されたと考えなければ、子供の身体そのものが杵によって潰されてしまう。これでは、初誕生儀礼のケジメ的性格が生かされない。

20の小谷村黒川でも、子供に三個の餅を背負わせ、箕の中に立たせて、麵棒で突いていた。この時、「転ばなければ丈夫に育ち、転ぶと弱い」という。ここでは、麵棒による突きが子供のじょうぶさを占う仕掛けとして解釈されているが、本来は19の如く戦前では突き倒しと歩行促進という互いに相反する儀礼が同居していたのである。麵棒の杖による歩行促進の面が早くに廃れた結果、突き倒しの一面しか残らなかつたため、初誕生儀礼に於ける解釈も一面的なものになってしまい、本来のケジメ的性格はこの段階で完全に消滅してしまい、ひいては初誕生儀礼そのものの意義が変質せざるを得なくなるのであった。

21の南北安曇部の事例は、極めて短い報告ではあるが、昭和一三年頃のものでもあり、非常に重要な意味を持つ。即ち、「餅をついて背負わせ、箕の中へ立たせて、麵棒で突からかす」というのである。この安曇地方は、麵棒で突く事がよほど一般的であつたらしく、後に詳述するが、麵棒が登場する事例は3・18・19・20・21・24・25・28の八例であり、総て長野県北部に集中し、一つの文化圏を形成している。特に、初誕生儀礼の本質を考察する場合、

做されていたのである。

25の上水内郡小川村桐山の事例も重要である。ここでは、キナコや餡をつけたポタ餅一二個を米一升入る重箱に入れ、これを風呂敷に包んで子供に背負わせ、竹箕の上に麵棒を杖にして立たせる。「赤ん坊が立てた場合は、飯シヤモジで突いてころばす。それを三回繰り返す」のであった。ここにも、二つの相反する価値観が同居し、その事に関して何の矛盾も感じられていない。ポタ餅一二個を背負った子供が、箕の中で立てるような場合は、飯シヤモジで突いて転ばすのである。しかも、これは儀式として同じ事が三度も繰り返される。やっとの思いで立つ子供にすれば、たまったものではあるまい。「タカミ（竹の箕）の上に立たせる」とある如く、子供は本当は立ちたくないのに（かつての殆どの子供は、一二個ものポタ餅を詰めた重箱を背負って立ち上がる事は不可能であろう）、無理やり立たされるのであった。強制的に立たせた上で、突き倒されるのである。注目すべきは、この時の子供は麵棒を杖にして立たされる点である。

一方で麵棒の杖について立つ事を強制しておきながら、他方では飯シヤモジで突き倒し、これを儀礼として三度も繰り返すのであった。初誕生日そのものが、実際に子供が歩こうが歩くまいが関係なく、初誕生初歩きの原理によって、既に歩けるようになっていく子供は強制的にシヤモジで突き倒し、未だ歩けない子供は麵棒の杖によって無理にでも立たせようとしたのである。25の場合、世間の枠組みとして初誕生初歩きの原理が余りにも強くなってしまう、強迫観念として人々の上へのしかかって来た結果、子供の現状を無視して両方を一度に行なうのであった。本来ならば、既に歩ける子供に対してのみシヤモジによる突き倒しがあり、未だ歩けない子に対しては麵棒を杖とした立ち歩きだけがあつたはずである。

この場合、餅は既に立つ子供に対しては転倒狙いの負荷となり、未だ歩かない場合は「力餅」として、歩行促進のエネルギーと見做される。いずれにしろ、子供の過不足を補う物として餅は作用しており、初誕生初歩きの原理という世間の枠組みからすれば、二つの相反する意味が含まれていた。ここでも子供が背負った餅は、「臨席した人に分けて持つていってもらう」のであり、誕生時の胞衣に相当し、部外者には余り配りたくないものであつ

た。

26の上水内郡鬼無里村では、子供は糝混じりの粉ではなく、生藁まいたとして扱われている。ここでは、子供に重箱に入れた餅を背負わせ、入り口の土間に置いてあるジョウブ石（わらたたき用の平石——ジョウベ石ともいう）の上に立たせている。普通は神棚の前の座敷の上に箕を置き、この中に子供を立たせるのであるが、藁叩き用の平石の上に立つ。入り口の土間という境界も象徴的であるが、藁叩き用の平石も重要な意味を持つ。恐らく、この平石は普段は土間から座敷に上るための、足の踏み台にも使われていたのではなからうか。踏み台から立ち歩きが連想され、その結果初誕生初歩きの原則にふさわしいものとして活用するに至ったのであろう。さらに、縄・草履・俵などかつては日常生活の中でふんだんに藁製品が作られていた。主に糯米の藁が粘度が高いために使われていたが、そのままでは硬いため、水で少し湿り気を与えながら藁を打ち、軟かくする。この際に不必要な藁の根本の皮の部分も取り除く。これによって初めて糯米の藁は縄や草履などの加工原料となり得る。

初誕生を迎えた子供が、土間と座敷の境界線上にある藁叩き用のジョウブ石に立つ意味は、境界というケジメの場所と共に、糝混じりの粉から糝を取り除く如く、生藁まいたから有用な練藁ねわらにするために藁打ちによって根本の皮を取り除く如く、子供にケジメをつけようとした意図が含まれていたのである。このように考えれば、箕とジョウブ石の関係は極めて近いものになる。

藁打ち石は26だけでなく、14の上伊那地方東部にも有った。子供に餅を背負わせ、一斗の竹箕の中に子供を入れ、「糝実はそっちへ行け、いい実はこっちへこい」と三回唱えながら三回煽り出すが、これを藁を叩くあて石の所で行なう家もあったのである。ここでは、箕とあて石が並存するが、26ではジョウブ石だけで、箕は登場しない。かつては、箕だけでなく藁叩き石も初誕生に登場する余地があり、藁叩き石単独でもケジメの機能を果たしていた点に注目しておきたい。藁叩き石も、藁の選別機能を打っており、満一歳の子供のケジメには有効と見做されていたのである。

30の木曾郡檜川村では、「餅を背負つ子は今の子とちがって少なく、背負って歩く達者な子は少なかった」とい

う。昭和四七年の報告であるが、その当時の実感として、一世代前の子供の一歳未満の歩行はかなり珍しく、時代の推移と共に一歳未満の歩行が決して珍しいものではなくなりつつある状況をよく示している。少ない中でも、「隣近所へ背中に餅をつけてもらい、手をひいてもらって、おくばりできる子もあった」わけであり、「このような子供は達者な子だといって喜ばれていた。10の如く、「誕生前に歩くような子供は一生運が悪いといって、そういう子供には誕生を早め」て祝った昭和一三年の報告と較べれば、僅か三四年間の開きであるが、まさに隔世の感を否めない。全く異質で、逆転した解釈がそこに展開されるのであった。同一県内で、しかも佐久郡栄村と木曾郡檜川村では直線距離にすれば、そんなに離れていない。時代の推移が、いかに世間の価値観に大きな影響を及ぼすかがよく理解できよう。この事から逆に類推すれば、かつては長野県下でも一歳未満の歩行はかなり広範囲に忌避されていたのではなからうか。麵棒による突き倒しの分布が北部に集中する点などを考慮すれば、10の如き「誕生前に歩くような子供は一生運が悪い」という伝承を、県の中東部にのみ見られる特異な事例として解釈する事はできない。

30の檜川村では、箕の代わりに「ゴミトリ」を使っていた。初誕生日に、「板で新しいごみとりを作り、その中へ子供を坐らせ、年寄衆がかかるがわるそのごみとりを持って、しいなはこぼれて実が残れ、とうぼうさくは、くまんくまん。せんくひやくじゃく、これにあやかれあやかれ」といって振るるのであった。「ゴミトリと言っても、しいなはこぼれて実が残れ」という唱え言から判断すれば、明らかに選別機能を持っており、所謂掃除道具ではなく箕の一種類と見做すべきであろう。これと同様の物は、4の大町市宮本でも見られた。ここでは、トアオリ（板箕）と言うが、板製の煽る道具という意味でこの名称がつけられたのであろう。ここでも、唱え言は「しいなは舞っていけ、実は生まれ」であり、選別機能が明確に認められている。「ゴミトリの」ミと、唱え言の「しいな」は、同じ意味（満一歳の子供の排除すべき部分）を持っていた点に注目しておきたい。

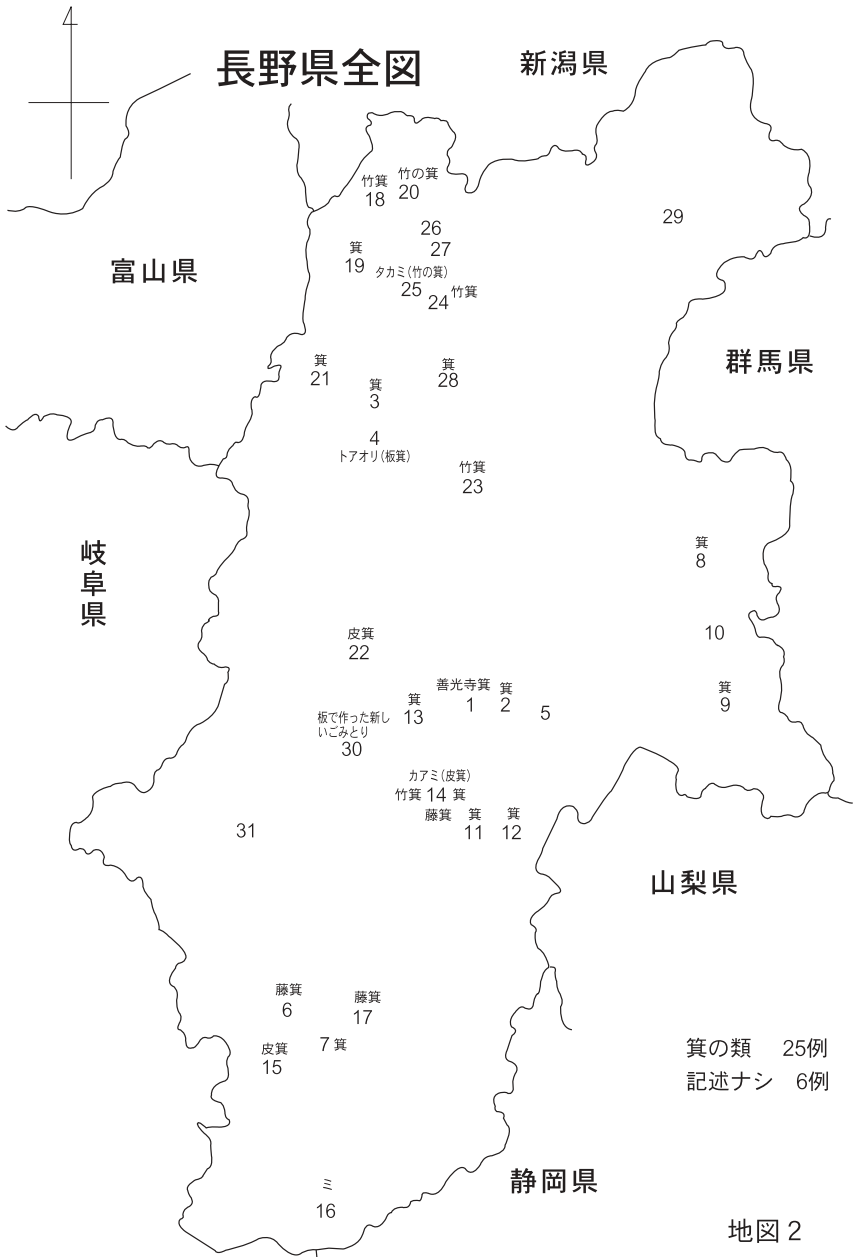
四、箕の分布・種類とその機能

ここで、県下全域の箕の詳細を俯瞰しておこう。これを纏めたものが地図2である。全三一例中、箕を確認できたものが二五例あり、残りの六例（5・10・26・27・29・31）では初誕生儀礼に関する記述が極めて簡略であった場合もあり、確認できなかった。実際は使っていた可能性は高い。逆に、箕を使わないと明言する事例は一例も無かった。とりあえず、現時点で確認できる段階で判断すれば、全三一例中二五例であり約八〇%の地区で箕が登場していた事になる。分布状況も、ほぼまんべんなく全県下に分散していた。初誕生儀礼で、これ程高い割合で箕が登場する都府県は、東北・関東・北陸・中部地方の中では長野県以外には見られない。比較的多かった群馬県では三九%、新潟県でも三七%程度であり、八一%という数字は両者の倍以上に達し、いかに支配的であったかが理解できよう。19の資料で紹介したが、佐伯隆治は『民間伝承』一〇巻二号の中で北安曇郡内の初誕生儀礼を報告する際、「誕生祝は箕の中」という表題をわざわざつけている程である。これは独り北安曇郡内に止まらず、長野県全域に言える事柄であったと判断しても間違いあるまい。八一%という数字は最低限であり、これ以上に増加する可能性は極めて高いのである。長野県は箕の文化が独自に発展した地域であったと言える。

一口に箕と言っても、詳細に見れば様々な種類がある。竹箕・藤箕・カアミ（皮箕）・トアオリ（板箕）・善光寺箕など、その材質や形などにより数多くのヴァリエーションがあった。しかし、基本的には選別用具としての機能が、満一歳の初誕生日のケジメに活用されていた点ではほぼ共通する。

次に、箕の機能を確認するために、各事例に於ける唱え言を明確にしておこう。

- 1・しいなは出て行け、実だけ残れ。
- 2・實は箕へ残れ、はしか（糶）は跳しけ出る。
- 3・糶は出て行け、よい実を残れ。



箕の分布とその種類

4・しいなは舞っていけ、実は止まれ。

6・よいしょ、よいしょ。

7・しいなが舞って、實が残れ。

11・糺は出ていけ、実は残れ。

12・しいなは舞ってけ、実は残れ。

14・糺はまつて実は残れ。・いい実はこつちこい、糺はそつちいけ。・糺は出て行け実は残れ。・…ちゃんの、糺

は出て行け、実は残れ。・浦島太郎は百三つ、…(子供の名)も百三つ、糺は出て行け、実は残れ。・糺実はそつ

ちへ行け、いい実はこつちへこい。・実は残れ、かすは飛んで行け。

17・しいなは舞って実は残る。

19・シイナは出て行け。

22・しいなは舞い出る、実はとまれ。

23・しいなは舞ってけ、実は残れ。

30・しいなはこぼれて実は残れ、とうぼつさくは、くまんくせん。せんくひやくじやく、これにあやかればあかれ。

以上、一四例(全体の約半数)で唱え言の詳細が確認できた。6の「よいしょ、よいしょ」だけが特異であるが、他の一三例は総て糺と中味の充実した物を分離する意味を込めた唱え言であった。重要な個別の事例については、前節で詳述したために割愛するが、初誕生日を迎えるに際し、どうしても糺を排除し、中味の充分に詰まった物は残さねばならなかったのである。儀礼内容に忠実に従えば餅を背負った子供の生身の体が、糺と中味の詰まった物に分化する。糺と中味の詰まった物に象徴されるものが、子供にとって一体何であったのか、ここにこそ、初誕生儀礼の本質が隠されているのであった。

唱え言だけを抽出して一覽すれば、改めて初誕生日が通過儀礼上極めて重要な意味を持っていた事に気付かされる。肉体的には既に一年前に生まれているのであるが、本当の意味でヒトの子と見做されるためには丸一年を要し

たのである。ヒトの子になるための条件は、初誕生日当日に初歩きをする事であり、初歩きがこれより早くてもいけないし、また遅くてもいけない。ヒトの子として見做されないものである。強烈な世間の枠組みの中にながちりと組み込むため、初誕生儀礼は若干形を変えたり、変質しながらでも基本的部分は殆ど変わる事なく存続しつづけるのであった。

唱え事は全三一例中一四例で確認できたが、この一四例には総て例外なく箕が介在するのであった。箕の選別機能と、二足歩行するヒトの子になるためのケジメ儀礼は、まさに表裏一体の形で結びついていたのである。

さらにこれら唱え言群からは、ケジメだけでなく、もう一つ長命祈願の側面も見えてくる。独り特異であった6の「よいしょ、よいしょ」は、歩けない子供を藤箕に入れて年寄りが振る時のかけ声であるが、ここでは年寄りが子供を抱くとその子供が長生きをするとも言い、年寄りが交互に抱いていた。また、12では「万年よ万年よ」と唱える。さらに14では、「浦島太郎は百三つ、…(子供の名)も百三つ、枇は出て行け、実は残れ」と唱え、30では「しいなほこばれて実は残れ、とつばづぎくは、くまんくせん。せんくひやくじやく、これにあやかれあやかれ」と唱えている。14では、浦島太郎の百三歳にあやかつて、子供も百三歳まで生きるようにと願い、12では「万年」の長寿を願う。30に至つては謡曲に出てくる東方朔まで登場させ、九万九千歳まで生きたから、子供もこれにあやかつて無限の長寿を祈願するのである。

長寿祈願が初誕生儀礼の当初から有つたものか否か不明であるが、満一歳の初誕生日に初めてヒトの子として扱われる機会に、今後のヒトとしての長命を期待する事の付加があつても不思議ではなからう。

五、餅とその周辺

初誕生祝い、ややもすれば餅背負いの現象だけが注目されるが、この餅はいきなり子供に背負わせるのではなく、最初は厳かに神前に供えられるものであった。言わば、神事の二環として餅背負いがあつたのである。全三一

例を通覧した場合、その神事性はなかなか見えにくかったが、少し注意して目を凝らせば、いくつかその名残りが窺える。例えば、6の「丸いお供え餅」とか、14の上伊那地方南部では「お祝いが終ると、お供えは幾つにも切ってお土産にやる」とあり、餅が神棚に供えられていた事がわかる。さらに同地方東部の高遠町黒沢では、「三升三合の餅を搗き三つのお供えに分ける」とあり、一升一合ずつを単位として神前に供えていた。また同地方東部では、「三升三合五勺の餅を搗いて、大きなお供えを作って床の間へ飾る。お神酒・鯛かいなだのお頭つき二匹が供えられる」とあり、かなり詳細に神祀りの様子が描かれている。

この他、28の「餅やそばをつくり新仏にも供え」とか、30の「背負わせる前に神棚にしんげた」という記述からも、餅が背負う前に神前に供えられていた事を明確に把握し得た。

以上、四報告で延べ六例しか確認できなかったが、初誕生儀礼に於ける餅背負いは、元来これだけで独立したもではなく、優れて神事の一環であった事を再認識しておきたい。

一方、餅は他の都県では、尻に当てたり、尻に投げつけたり、背中に背負ったり、背中に投げつけたり、脚に投げつけたり、脚に押しつけたりと、様々なヴァリエーションがあった。長野県下では、全三一例中餅の位置を確認できたものが10を除く三〇例であり、その三〇例中二九例までが背負う形式であった。独り16の一例だけが餅を頭の上に乗せていた。初誕生の餅と言えば、長野県下では九七%が背負うものであり、圧倒的多数を占める。

ところが、この背負い餅にはかなり無理がある。例えば3では、「この頃から歩きはじめる」ので、履物や着物が贈られており、子供はまだ十分に立ち歩きができない。しかも「歩きはじめる」といつても、これは早熟な子供の場合であり、殆どは一歳二ヶ月程しなければ初歩きはできなかった。このような矛盾を指摘するように、6では「昔の子どもは今の子どもみたいに初誕生といつても歩けん子が多かったが、丸いおそなえ餅を風呂敷にくるんで背負わせて歩かせて」と言つ。まだ這い這いの段階で立ち歩きができないにも関わらず、初誕生祝いだとして無理に立てらせ、さらにその上供物の餅まで背負わす。「伝承者自身も一種の不可解さを感じていたのではなからうか。また30でも、「餅を背負う子は今の子とちがって少なく、背負って歩く達者な子は少なかった」と言つ。背負って

立つ子さえ少ないのに、さらに歩く子となればもつと少なかったはずである。しかも、昔になればなる程、産育環境も決して良くはなく、一歳未満で歩く子など殆どいなかったのではなからうか。この辺の事情が、「今の子とちがつて少な」といという言葉によく反映されている。

僅か三例で、全体の一割にも満たないが、かつての伝統的社会に於ける子供の実情がよく理解できよう。こんな中で、餅背負い儀礼が展開されるのであるから、生身の子供の体にとれば大きな迷惑であった。恐らく、通過儀礼上の一つの試練として、満一歳の子供に強制的に課せられたものである。実情は全く考慮せず、極めて強烈に満一歳の初誕生を迎えた子供を世間の枠組み（「初誕生初歩きの原理」）に押し込むのであった。この枠組に入りきらない者は、「鬼子」とかケモノとしてのレッテルを貼られ、人間扱いされず、象徴的な殺害さえあったのであるから、矛盾を感じる余裕など全く有り得なかつた。私としての生身の体の実情などは、公としての世間の枠組の前では完全に無視されるのであった。世間の枠組みの力、恐るべしである。

さて、生身の体の子供から見れば殆どヤラセであるが、餅背負いの評価は極めて高い。

- 1・子供に背負わせ強くなれと祈る。
- 2・昔は餅を非常に尊んだものであるから之に一生ありつけるように、又は力餅と稱して体力の出るやうに。
- 3・あんに砂糖を入れない甘くない餅を月の数一二に、重箱に入れて風呂敷に包んで背負わせる。
- 6・一歩でも二歩でも歩ければみんなで拍手喝采をして喜こんだ。
- 8・重箱につめて背負わせ、箕の中へ立たせて祝う。
- 9・餅を重箱に詰め、箕の中に入れた赤ん坊に、この重箱を背負わせて力が出るやうにと祈る。
- 12・「万年よ万年よ」と唱える。
- 14・「千年よう、万年よう」と唱える。
- 15・誕生に歩く児は、成長が早いといつて喜んだもの。
- 16・ミの中に子供をすえておき、そこへ大福餅を投げてやつたり、ますの中に大福餅を置いてやると、じょうぶな

子は拾ってかみつく。

18・(麵棒で突いて) もしころはなければ丈夫に育つ。

20・(麵棒で突いて) 転ばなければじょうぶに育ち、転ぶと弱い。

30・(餅を背負って手をひいてもらい、近所に餅を配る) 子供は達者な子だといって喜んだ。この日はまた、おかざり餅を一二個つくり、集まった者達はその餅を達者に育つようにといって子供の体にあててやった。

31・子供が独力で歩ければ発育がよく強い子どもだといってよろこんだ。

餅背負いの評価は、全三一例中一七例で明らかになっている。この明らかになった全一七例中、一四例までが肯定的な評価を下しており、八二%を占めている。中には、麵棒で突く事例の所で詳述したが、明らかに元は子供の転倒を狙ったと見做される18・20の麵棒で突く事例でさえも、転ばなければ「丈夫に育ち、転べば「弱い」と説明するケースも含まれている。殆ど歩けない子供を無理やり立たせ、その上に餅まで背負わせて褒めちぎる姿の裏に、初誕生初歩きという世間の枠組みに是が非でもはめ込もうとする強烈な強迫観念が潜んでいるような気がしてならない。

その一方で、僅か三例ではあるが、逆に子供を突き倒すなどして、歩かせない事例もあった。

10・誕生前に歩くような子供は一生運が悪い、そういう子供には誕生を早める。

14・さあころべと行ってころばす。

25・赤ん坊が立てた場合は、飯シャモジで突いてころばす。それを三回繰り返す。

これら三例は、いずれも一歳未満で子供が立ち歩いた場合であり、歩いた子供は逆に突き倒されるのであった。10の場合、子供を倒すのではなく、誕生日を実際よりは早めに繰り上げていて、子供を物理的に突き倒す代わりに、誕生日そのものを前倒ししたものであり、実質は子供を倒した事と同じである。

誕生前に歩く子供は、10の如く、「一生運が悪い」といって非常に嫌われていた。しかもこれは昭和一三年頃の報告であり、かなり古風を留めるものであった点に注目しておきたい。前述の如く、15や31では誕生日に子供が独力

で歩けば「成長が早いといって喜ぶ」が、かつてはそんな単純なものではなかった事を暗示する。18・20の麵棒で突く儀礼も、明らかに転倒を狙ったものであった。このように見れば、餅を背負って歩いた子供を突き倒す儀礼が、三例ではなくかつてはもっと多かつたと考えられる。恐らく、肯定的評価と否定的評価は相半ばしていたのではなからうか。

いずれにしても、子供は歩かないと言っては餅を背負わされ、歩いたと言っては餅を背負わされていた。餅を背負う運命からは逃げられなかったのである。歩かない場合は、2の如く「力餅」などと呼ばれたり、30の如く「達者に育つ」ようにといって餅を背負わされたり押しつけられたりするのであった。歩いた場合は、餅は負荷として転倒狙いで背負わされ、さらに突き倒されるのである。初誕生初歩きの原則が、世間的枠組みとして子供に強制的に適用されるのであった。

ケジメをつけるために背負った餅であるが、これは歩ける子供には歩けないように、歩けない子供には歩けるようにする魔法の餅でもあり、この点にこそ「糶」が象徴されていたのであった。これは言わば、不名誉な歓迎すべきではない、いわくつきの代物しろものである。この餅の処分に当っては、人々は細心の注意を払っていたように思われる。別稿（「餅のゆくえ——富山県下における初誕生儀礼——」森隆男編『民俗儀礼の世界』所収 清文堂）で詳述したが、富山県の一部では、これは川に流し捨てる程嫌われていた。この嫌われ方が、長野県下では「糶」として広く一般的に忌避されていた事は大いに注目すべきである。

背負い餅の処理方法は、七地区でしか確認できなかった。2「子供に負はせた餅は客人達が分けて食べる」、3「背負った餅はみんなで食べた」、17「子供に背負わせ、この餅を切つて近親にくばった」、18「この餅（背負い餅三つ）は、一つはトリアゲ婆さんに、一つは里親に、残りの一箇は家で食べた」、20「この三個のうち一個は取り上げ親（産婆）へ、一個は嫁の親にくばり、残りの一個は家出食べる」、24「臨席した人に分与する」、25「背負った餅は、臨席した人に分けて持つていってもらつ」とある。

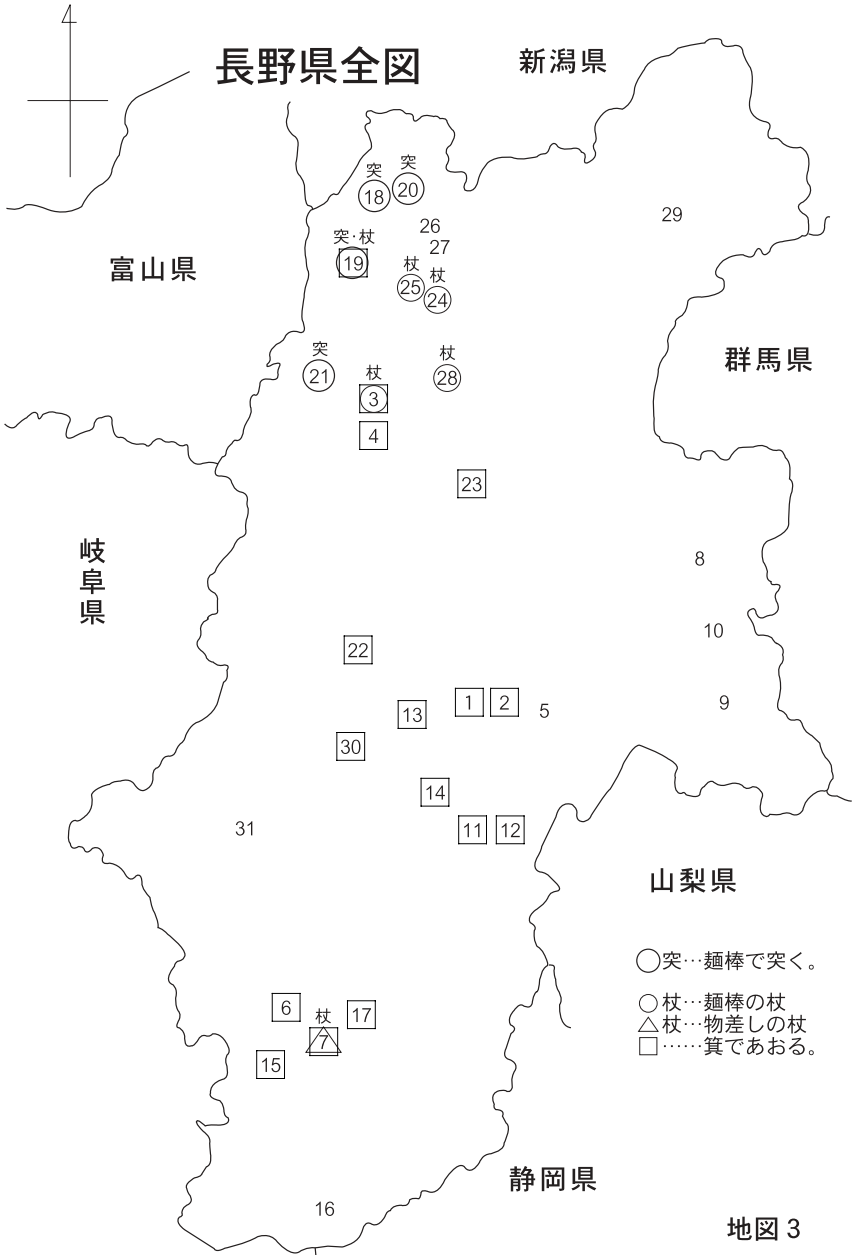
全七例は、各々少しずつ表現が異なるものの、参加者全員が分けて消費するという点では総てに共通する。殆ど、

部外者には配っていない。確かに、他の事例では、出産祝いの時に金品を買った親戚や近所・知人に「誕生餅」として配ってはいるが、これは子供が背負った餅ではなく、最初から配布する事を念頭に置いて搗いた餅である。一口に「誕生餅」と言っても、子供が背負った餅とそうでない餅の間には、全く異質な性格が賦与されていた事を見逃してはならない。これを見過せば、初誕生儀礼の本質を把握できないであろう。この両者の間には、かつて生死を掛けた縁起直しと、単なる祝い程の、絶対的な質の違いがあったのである。

六、箕で簸る、杖で突く、杖をつく

箕の分布は地図2で示した如く、全三五例がほぼ全県下に分布していたが、実際に選別機能の所作を演じるものもあった。1「(糶を)とるまね」、2「簸るまね」、3「はぎるまね」、4「あおる」、6「振る」、7「三回あほる」、11「あほり出すまねをする」、12「ヒダス」、13「ハギレ出した」、14「あおる(北部)、あおる(中部)、三べんくりかえしてあおる(南部)、三回ひだす(あおりだす)(東部)」、15「あおる真似をする」、17「ヒダス」、19「ハギル真似をする」、22「あおる」、23「あおる」、30「振った」とある。箕を活用する全三五例中、一六例で実際に簸る所作をしていた。形だけでなく、実際に箕の選別機能をいかに期待していたかがよく理解できる。糶を排除して充実した初を選別する如く、満一歳の子供も糶と初に選り分けられていたのであった。(拙著『鬼子』と誕生餅)でも詳述したが、一連の箕は、福岡県北部に分布するユリの機能とも軌を一にする(既に歩く子は、歩く事自体が糶に比定され排除の対象とされ、未だ歩かない子は歩かない事そのものが糶と見做され、排除の対象となっていた。初誕生初歩きの原理は、極めて強烈で厳密なものであり、一―二日の遅速も例外を認めていない。このため、餅と同様に箕もまた殆ど総ての事例で登場する、初誕生儀礼に於ける必須アイテムであった。

一方、餅と箕のセットと並存する形で、県北部の3・18・19・20・21・24・25・28の八地区では麵棒が登場する。これら八地区では、子供に餅を背負わせ、箕の中に立たせるのであるが、さらにその上で麵棒が登場するのである。



しかもその麵棒は、ある時は杖として歩行を促進するし、逆に転倒を狙って後ろから突く場合もあった。19・24・25・28は杖として歩行を促進させるが、18・19・20・21は、やっとの思いで箕の中で餅を背負って立つ子を後ろから突くのであった。19の場合、戦前の報告であるが、歩行の促進と転倒の両方の意味を持たせており、かなり古風を留めたものと言える。山形や福島県で同一の餅が、子供が立てばブツタオシ餅、立たなければブツタテ餅と呼ばれた如く、この麵棒も子供が立つか否かによって、突き倒しに使ったり、歩行促進の杖として使ったものと考えられる。言わば、ケジメをつけるための魔法の杖でもあった。これら八例の分布状況を図示したものが地図3である。見事なまでに、県の北西部に集中している事がよく理解できよう。

杖の視点に注目すれば、県の北西部から遠く離れた県南部の7の飯田地方でも昭和八年の報告であるが、子供に物差を杖につかせていた。時代を考慮すれば、これもかなり古風なものである。恐らく、ここでももし子供が既に一歳未満で立ち歩くようになっていれば、歩行促進のための杖としてではなく、転倒目的で後ろからこの物差しで突いていたのではなからうか。この分布状況から判断すれば、かつては県北部だけでなく、南部を含むほぼ全域に麵棒や物差しといった魔法の杖が、ケジメをつけるために分布していたと考えられる。

七、結びにかえて

ケジメのための箕で簸る儀礼であるが、実際に誰が行なったかを明言する報告は案外少ない。3「嫁の実家の母親」、6「年寄」、12「実家の親、婚家の親、仲人の順にする」、14「仲人」、17「仲人の女親が行なつ」、18「トリアゲ婆さん」の六例でしか明らかになっていない。六例中12・14・17の三例は仲人であり、半数を占める点に注目しておきたい。次いで母方の祖母が12・13の二例、最も少ないのが年寄り・婚家の親・トリアゲ婆さんで各一例であった。但し、18のトリアゲ婆さんはその性格上子供をあの世界からこの世に取り上げるため、境界領域にいる存在と見做し得る。さらに最も多かった仲人も、子供の両親にとれば二つの世界を結びつけた存在であり、子供が誕生

する原因を構築した当事者である。仲人もまた文字通り、境界領域に居るべき存在であり、トリアゲ婆さんと同一視し得る。この結果、全六例中四例即ち七割近くで、子供を入れた箕を境界領域に居るべき人が煽っていた事になる。初誕生儀礼に於けるケモノからヒトへのケジメを考慮すれば、この高い比率の原因は、仲人やトリアゲ婆さんといった境界に居るべき人こそが最もふさわしいと見做されていた事にある。

初誕生祝い、家の経済的事情や地域の特性によっても様々であるが、長男・長女の場合は盛大に行なわれていたようである。参加者と祝宴の規模について少し注目しておこう。1「里の両親やお仲人さま、近い親戚などを招いて小宴を張って祝う」、5「里の両親や知友を招く」、6「初めての子ども時は嫁方の者を呼んで盛大にやった。男の子の場合は特に賑やかだった」、7「親戚」、8「近親や近隣、またお祝いをもらった家には餅にあんをつけて重箱につめてくばる」、11「仲人様、鉄漿親その他近親者を招き、赤飯をたいて誕生日を祝う」、12「実家の親、嫁家の親、仲人」、13「近親をよんでお客をする」、14「里親はじめ近親を招いて祝う（北部）。仲人、里の親、近親、産婆等をよぶ（南部）」、17「親戚」、20「客立てはお七夜やお宮参りのときより広く、黒川全戸の北村まで招待する」、24「近所の人、里の親、親類をよんで祝う」、25「初子のときには、近所の人、里の親、親類を招いて餅をつけて食べてもらう」、26「里親や親分、近親を招いて祝宴」、28「婚礼のときと同じほどの客ヨヒをする」、29「新しい親類をよんでごちそう」、30「初子の時は、嫁の実家をはじめ親戚衆をよんで盛大にやった」、31「里方の親を呼んで祝う」という。

全三一例中、一八例で招待客の詳細が確認されたが、これを項目別に頻度の高い順に並べると次のようになる。

- ・ 里の両親。 1・5・6・12・14・25・26・30・31（九例）
- ・ 近い親戚。 1・8・11・13・14・26・29（七例）
- ・ 親戚。 7・17・24・25・30（五例）
- ・ 仲人。 1・11・12・14（四例）
- ・ 近隣。 8・24・25（三例）

- ・ 知友。 5 (一例)
- ・ 鉄漿親。 11 (二例)
- ・ 産婆。 14 (一例)
- ・ 村全戸。 20 (二例)
- ・ 親分。 26 (一例)
- ・ 婚礼の時と同じ程。 28 (一例)

やはり最も多いのは、親戚の中でも最も身近な母方の祖父母であった。これに「近い親戚」と「親戚」が次ぐ。この他、「仲人」も四例と多く、初誕生儀礼が婚姻儀礼と同程度の重要な儀礼として認識されていた事が窺える。そう言えば、28では明確に「婚礼のときと同じほどの客ヨビをする」と表現しており、初誕生を重要視していた。さらに20では、お七夜お宮参りよりも広く招いて盛大にし、里の両親や親戚・仲人は勿論の事、一集落全戸を招待して祝う程であった。家の経済状況や、地域との繋がりに依るであろうが、長野県下では総体的に初誕生儀礼をかなり重要視していたと言えよう。満一歳のケジメは、婚礼と同じかそれに次ぐ程に位置付けられていたのであった。この事は、事例数の多さや、餅背負いや箕の活用の頻度の高さにも明確に表われていた。

招かれた客や、誕生餅の配布を受けた家は、お返しとして特定の物が決められていたようである。その詳細について言及する報告は管見には四例しか見当らなかったが、少し注目しておこう。

2 「親戚からは主として下駄・足袋・靴等の履物を贈って祝ふ」、3 「この頃から歩きはじめるので、履物・着物などが贈られる」、18 「親類や近所へは餅を配った。そのお返しは履物(下駄草履)とか足袋などだった、28 「客はお祝いに衣料などを持ってくる」とある。

全四例中三例までが下駄や草履・足袋など歩行に係する足まわりの品々であった。着物などの衣料も3・28の二例で見受けられる。抑々誕生餅配布の返礼とか、初誕生祝い招待のお礼であれば、どんな品物でも良かったはずであるが、どういいうわけか履物が多かった。この裏には、初誕生初歩きという世間的枠組みが隠然として強烈に存

在し、これによって是が非でもこの日に歩かなければならないという強迫観念が横たわっていたような気がしてならない。確かに、満一歳の子供の誕生祝いの品を考えれば、誰でも簡単に履物が思い浮かぶであろう。しかし、箕・背負い餅・「靴は飛んで行け実は残れ」などの唱え言・麵棒など、一連の初誕生儀礼の詳細を考え合わせれば、事はそんな単純なものでは済まされない。これら履物の贈与は、初誕生初歩きという強迫観念の裏返し形の形で存在していたのであり、これ程までに世間的枠組みが強烈であった事を示す証左であった。

言わば、一歳未満で歩行する「鬼子」、またはまだ這い這い状況にある四つん這いのケモノから二足歩行としてのヒトの子への変革であり、一度ヒトの子に変革したからには、ヒトとして成長しなければならぬ。その視覚化が、所謂エラビドリであった。長野県下では例外的に僅か二例しか見られなかった（拙著『鬼子』と誕生餅）でも詳述したが、エラビドリの分布範囲は主に近畿地方以西であった）が、その詳細を見ておこう。

14 「男の子のときは書く道具（硯か筆）・本・そろばん・大工道具一つ・作道具（農具）の五種類、女の子はそろばん・筆・本・針道具・編道具の五種類を並べておいて、這って行ってその一つをつかませる」、15 「筆や算盤・本・物差等の内、好きなものを取らせる。子供はとつたものを得意とする」という。

満一歳の初誕生儀礼で、「靴は飛んで行け、実は残れ」と唱えて箕の上で餅を背負わした如く、子供の靴的部分、即ち満一歳すぎてもまだ這い這いのままという四つん這いのケモノ的性格、または逆に一歳未満で既に二足歩行を始めてしまった過熟児としての「鬼子」的性格が完全に排除された結果、純正のヒトの子になれたのである。純正のヒトの子とは、初誕生初歩きの原理を忠実に守つた子であり、立ち歩きの開始は一日の遅速も認められない。實際の立ち歩きが初誕生日より早い子は、その早い事が靴として見做され、初誕生日より遅い子の場合、その遅い事が靴に比定されていた。箕や餅背負い・唱え言・麵棒などの様々な仕掛けによって、ケモノ的性格または「鬼子」の性格が被われ、純粹なヒトの子として精製される事によって、初めてこのエラビドリの儀礼に辿り着けるのであった。僅か二例しか見られなかったが、このエラビドリこそ一連の初誕生儀礼の総括部分に相当するのではなからうか。エラビドリ儀礼の中には、将来のヒトとして生業（なまひ）が視覚的に表現されるのである。これこそ、まさにヒトとな

りと言つべきであらう。

[註]

- 箱山貴太郎稿「長野県の祝事」、『南中部の祝事』所収、八一頁、一九七七年一〇月刊。
- 文化庁編『日本民俗地図 出産・育児』二〇九頁、一九七七年五月刊。
- 有賀恭一稿「各地の誕生習俗・長野諏訪湖畔地方」、『旅と伝説』六卷七号所収、二五三頁、一九三三年七月刊。
- 長野県史刊行会民俗編纂委員会編『長野県大町市社 館之内 民俗誌稿』一八頁、一九八〇年八月刊。
- に同じ、二〇七頁。
- に同じ。
- 長野県教育委員会編『太平の民俗——集団移住した飯田市太平部落——』一〇七頁、一九七二年九月刊。
- 岩崎清美稿「各地の誕生習俗・長野県飯田町附近」、『旅と伝説』六卷七号所収、二四四頁、一九三三年七月刊。
- に同じ、二〇二頁。
- に同じ、二〇一頁。
- 恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』四六二頁、一九三八年頃報告、一九七五年三月刊。
- 高遠町史編纂委員会編『高遠町史 下巻 自然・現代・民俗』一三五七頁、一九七九年七月刊。
- に同じ、二一〇頁。
- に同じ。
- 上伊那誌編纂委員会編『長野県上伊那誌 第五巻 民俗編上』五四五～五四六頁、一九七〇年一月刊。
- 清内路村誌編纂委員会編『清内路村誌』三三一頁、桜井伴稿、一九八二年三月刊。
- 天竜村教育委員会編『南信濃天竜村大河内の民俗』一五四頁、一九七三年七月刊。
- に同じ。
- 小谷村教育委員会編『小谷民俗誌』二六八頁、一九七九年三月刊。
- 佐伯隆治稿「誕生祝は箕の中」、『民間伝承』一〇巻二号所収、三〇頁、一九四四年二月刊。

- ②1 同じ。
- ②2 同じ。
- ②3 同じ。
- ②4 同じ。二〇八頁。
- ②5 国学院大学民俗学研究会編『三十五年度年刊民俗探訪』一〇四頁。
- ②6 小川村教育委員会編『北信濃小川村桐山の民俗』一八五頁、一九七三年七月刊。
- ②7 長野県教育委員会編『裾花溪谷の民俗——裾花川ダム水没地区民俗資料緊急調査——』六四頁、一九七一年二月刊。
- ②8 同じ、二〇五頁。
- ②9 同じ、二〇三頁。
- ③0 ②8と同じ。
- ③1 檜川村教育委員会編『木曾檜川村の民俗(一)——奈良井・平沢・贄川——』一五一頁、一九七二年二月刊。
- ③2 長野県教育委員会編『木曾三岳村の民俗——王滝川ダム水没地区緊急調査——』四七頁、一九六八年三月刊。